

宋代の地域社会と宗族

—その学説史的検討—

遠藤隆俊

序論

かつて、日本における中国史研究の主流は政治制度史であり、この分野に関する研究蓄積は非常に多い。それは史料の多くが官制史料であり、また政治や制度の方が中国史の動きや骨格が見やすいという利点があったことと大きく関係している¹⁾。ところが一九八〇年代以降、文書史料が数多く出版刊行され、またアナール学派の紹介など西洋史や日本史の影響もあり、社会史が次第に大きな地位を占めてきた。中でも明清史や宋元時代史の分野においては「地域社会」という概念を軸にそれまでの研究が見直され、また家族や宗族さらには人的結合関係を中心とする論考も盛んに発表されるようになったのである。そこで、本稿では宋元時代における地域社会と宗族に関する近二〇年来の学説史を検討しながら今後の課題を考えるとともに、日本における中国社会史の動向を宋元時代史の視点から探ろうとするものである。

ところで、宋代における地域社会史の研究に関しては、既に宋代史研究会報告集第七集『宋代人の認識』の前文「相互性と日常空間——「地域」という起点から——」（宋代史研究会01）の中でも述べられている。しかし、この前文においては、海外の研究については比較的詳しく触れられているが、日本の研究動向とりわけ宋代史研究の状況やそれと明清史との関わりなどについてはあまり詳しく論じられていない。また、この前文では一九七〇年代までの研究と八〇年以降の研究とが連続的に取り上げられているが、やはり八〇年代に始まった地域社会史研究とそれ以前の地域的な研究とは質的に大きく異なるものであり、それらをあまりに

も連続的にとらえるとかえっていらぬ混乱を生むことになりはしないかと考えている。以上のことから、結果として屋上屋を重ねることになるかも知れないが、私なりの整理と展望を行うことによって大方のご批判を仰ぐこととした²⁾。

なお、地域社会史研究と言えば、水利や開発など経済的側面に関する論考も非常に多いのであるが、ここでは割愛せざるを得なかった³⁾。また本稿で述べる内容の一部は岡元司氏、須江隆氏および筆者の共同執筆による英文の回顧と重なる部分がある（Endo 02）。あらかじめお断りするとともに、そちらを併せてお読みいただければ幸いである。

一、地域社会史研究

(1) 明清史と宋代史

まずは、明清史における地域社会史の動向から見てゆきたい。というのも、先にも若干触れたように日本の中国史研究において「地域社会」の問題を考える場合には、やはり一九八一年の名古屋シンポジウムが大きな画期となったと考えられるからである。そのシンポジウムについては、これを主宰した森正夫氏によって報告が出されている（森82）。それによれば「地域社会」の問題は単なる「地域的な研究」を意味するのではなく、かつて盛んに論じられた「地主・佃戸」関係や「郷紳支配論」など階級関係と国家、社会の問題を止揚する「場」として設定された、すぐれて方法的な概念であることは周知の通りである。したがって、氏の提起した「地域社会」の概念や方法は、それ以前の「地域的な研究」や社会学などで一般に用いられる「地域社会」とは明確に区別して考えなければならぬ。その後、氏の論点は大きく二つの路線として結実することになる。一つは地域史的な研究であり、もう一つは社会秩序の研究である。前者には例えば山本英史氏の編著（山本00）があり、そこでは明清近代における北京、江蘇、浙江、福建、広東、安徽、四川、新疆、

東北の各地域の様相が考察されている。また、後者には上田信氏(上田95)や山田賢氏(山田95)、さらには岸本美緒氏の研究(岸本99)などがある。とくに岸本氏の業績は明清時代における地域社会の問題を越えて中国社会史の方法論にまで洞察がなされ、前掲「相互性と日常空間」をはじめとする宋代地域社会史研究にも大きな影響を与えている。

このような中で、宋代史における地域社会の研究は、どのように進んで来たのであろうか。私見によれば宋代史における地域社会の研究は明清史よりかなり遅れ、はつきりとした成果が表れるのは八十年代後半から九十年代前半にかけてではないかと思われる。いま便宜上これを三つの時代に分けてみた。第一期は九十年代前半までの素描期、第二期は九十年代後半の発展期、第三期は二〇〇〇年以降の深化期である。素描期というのは、例えば寺地遵氏の論考(寺地93)に見られるように、ある地域の動態を史料に即して素描ないしは復元してみようという試みがなされた時期である。そして、この研究の背景には前記明清史の影響が大きくあったことは確かであるが、それ以上に後述する中国史研究会や高橋芳郎氏の議論に対する懐疑ないし批判の意味合いがより強くあったと言える。なお、この時期には「地域」と題する佐竹靖彦氏の大著(佐竹90)も刊行されている。

次に発展期とは、例えば斯波義信氏が紹介したハーバマスの「中間領域論」(斯波96)に見られるような新たな考え方が登場し、実証的にも地域エリートへの婚姻や科擧、あるいは水利、思想、信仰と地域との関係を論じた著作が数多く出された時期である。さらに深化期とはそうした様々な論考の中から、共通の視点や考え方、方法論を探ろうとする時期であり、宋代史研究会の前掲宋代史の報告集や岡元司氏らの論考(岡01)にもあるように、共通の話題や認識、テーマとしては「日常生活の意味構造」や「人的結合などの相互性」などがあげられる。この点は唐末五代の研究においても同様であり、例えば穴沢彰子氏や山根直生氏の論考

(穴沢99、山根02)においても同じような問題関心と視点が示されている。そして現在の地域社会史研究も、これら深化期の延長線上に位置づけられる。

(2) 宋代地域社会史研究の特徴

a. 再び宋代史と明清史

では、こうした宋代地域社会史研究の特徴は何であろう。それは大きく三つの点にまとめられる。一つは先にも述べたが、明清史に比べて数年から十年ほど遅れて研究が着手された、少なくとも成果としては明清史よりも遅く現れたという点である。しかし、これは宋代史研究の水準が低いとか研究が明清史よりも遅れていたからではなく、むしろ明清史以上に水準が高かったから、あるいは少なくとも明清史とはやや事情が異なる環境に宋代史があったからと考えられる。すなわち、先にも述べたように森氏が「地域社会」を提起した背景には、階級論的な考え方や「郷紳支配論」の止揚という目的があったことは周知の通りであり、同様の認識や志向性は宋代史研究者においてもある程度共有されていたことは事実である。しかし、宋代史においてはその頃既に「地主・佃戸」論争に対する決着の見通しがついており、また「郷紳支配論」に関連する分野としては士大夫研究という大きな蓄積があったために、「地域社会」の概念を強く意識して研究に当たる必然性が必ずしも存在しなかったのである。

すなわち、まず「地主・佃戸」論争について見れば、高橋芳郎氏が「国家的身分」と「社会的身分」を区別することにより、地主佃戸の関係をそのまま国家支配や社会秩序に結びつけて考える見方や方法を批判修正しつつあった(高橋01所収)。また士大夫研究においても、宋代史では早くから階級論を越えた文化史的、社会史的な研究が積み重ねられていたことは周知の通りである。例えば宮崎市定、周藤吉之、青山定雄

氏らの先駆的な研究をはじめ、七〇年代にはのちの地域社会史研究にも関連する伊原弘氏の研究が開始されている（伊原72）。こうした中で、階級論を止揚するために「地域社会」の概念を提示すると言われても、その意味自体がよく把握できなかった事情もあったであろうし、またその必要性をあまり感じないというのが八〇年代における宋代史側の反応ないしは立場ではなかったかと考えられる。

b. 国家と地域社会

もつとも、宋代史においてもその後は次第に「地域社会」の概念が浸透し、今日に至っていることは事実である。そして、そこには明清史からの直接的な影響もさることながら、宋代史なりの問題意識および宋代史研究が「地域社会」へと向かう自覚的な契機が存在していた。その契機の一つは前掲高橋身分制論が残した国家と社会の問題であり、またもう一つは従来の士大夫研究ではあまり触れられなかった地域への関心である。そして、この二つがまたそのまま宋代地域社会史研究の特徴につながっている。

そこで、宋代地域社会史研究の第二の特徴であるが、それは国家と社会の関係、ないしは社会の自律性・非自律性を問う論考や論争が非常に多いという点である。これは前掲高橋氏が残した地域の自律性という問題に大きく関係するとともに、八〇〜九〇年代にかけて中国史研究会が提唱した「中国専制国家の社会統合」（中国史研究会90）という考え方への懐疑ないしは批判の意味も込められている。例えば地域における社会の運営をめぐる戸田裕司氏（戸田90）や伊藤正彦氏（伊藤92）は国家ないし官府の力を積極的に評価するのに対し、寺地氏（寺地96）はむしろ地域社会の自律性や自己組織性の高まりをより強く打ち出している。言うまでもなく伊藤氏の考え方は中国史研究会の立場に近く、これとは反対に寺地氏の立場は前掲斯波氏の「中間領域」論に通底する。ま

た、水利や治田などの問題をめぐっても高橋氏（高橋02所収）はこれが公権力の介入によって行われたことを高く評価するのに対し、柳田節子氏（柳田95）は「父老」など中間層の役割をより重視した見解を提示している。この対立は主として「郷原体例」という史料用語の解釈をめぐって起きた問題であるが、その背景には単なる史料解釈を越えた宋代における国家と地域社会の関係をどうとらえるかという大きな問題が存在している。

同様の対立は例えば明清史研究でも見られるが、私の印象では明清史においてはいわゆる「国家論者」と「社会論者」がお互いの土俵に入って批判しあうことはまれで、お互いに自分の土俵を守りながら相手の土俵へ意見を投げかけるという議論が多いように見受けられる。これはおそらく宋代においては史料や研究対象が比較的限られており、その意味では研究者相互に史料や視点がある程度共有されているのに対して、明清史においては必ずしもそうではないという事情が反映されているのではないかと思われる。しかし、どちらにしても「国家と社会」の問題が地域社会史研究のメインテーマになること自体、ある意味では長い間政治制度史や国家論を伝統としてきた日本の東洋史学界の特殊性を物語るものであり、海外の研究においてこうした議論はあまり多く見られるものではない。すなわち、日本においては地域社会の問題を考える際に必ずと言って良いほど「それと国家とはどのように関係しているのか」「地域社会史研究には国家論がないではないか」という問いや批判が繰り返され、地域社会史研究そのものの論理を追究する場をあらかじめ閉ざしてしまふかのようなのである。もちろん、国家論や国家との関係はそれだけで重要な問題であり、それを捨象して良いと言っているわけではない。しかし、今後はこうした日本の伝統や特殊性を守りつつも、社会史にはまだ解明されていない豊富な話題や議論が数多く残されているので、あまり国家論にとらわれすぎずに社会史の地平を切り開いて行くこ

ともまた重要ではないかと思われる。

c. 地域士大夫と家族、宗族

さらに第三の特徴としては、地域社会の問題が常に士大夫と密接に関連して語られてきたという点である。これは先にも述べたように宋代史には以前から士大夫研究という大きな蓄積があり、それが明清史研究をはじめとする歴史学界全体の変化の中で視点が次第に地域へと移った結果と考えられる。もちろん、先にも断ったように地域社会史の中には水利、開発など、士大夫の問題とは直接的には関わらない論考も数多くある。しかし、宋代の地域社会史研究と言えば、やはり士大夫と地域との関係を扱った論考が非常に多く、これが宋代史の特徴の一つであると言っても過言ではない。例えば浙東温州における名族と科挙、婚姻の実態を扱った岡氏の業績(岡95)や、福建の地域史大夫と家族、社会の問題を扱った佐竹靖彦氏の論考(佐竹97)、徽州の名族と政治、社会の問題を扱った小松恵子氏の論文(小松93)、さらに江西の宗室と科挙を論じた小川快之氏の論考(小川98)、広東社会における士人と統治の問題を「漢化」の視点から論じた森田健太郎氏の論文(森田02)などがあげられる。七〇年代までの士大夫研究にもこれらと同様に地域社会の問題に先鞭をつけた士大夫研究はあるが、かつての士大夫研究と言えばやはり科挙、官僚制と密接に関連していたことは事実であり、その視点が中央政界から地域へと下がり地域と士大夫との関係がより重視されるようになったのはやはり八〇年代以降のことである。

これに関連して、宋代史研究の場合には歴史分野のみならず思想史や文学史との連携など、いわゆる学際的な研究が数多く見られるのも宋代地域社会史研究の特徴の一つである。例えば小島毅氏(小島93)は福建地域における朱子学の普及と名族の関連を論じ、同じく須江隆氏(須江98)は福建における宗族関係とその祠廟や信仰への影響を考察している。

また近藤一成氏(近藤96)も朱子学と地方政治の関連を士大夫の面から統一的に考察したように、政治と思想、社会と宗教など様々な分野を複合的に考察した論考が多い。その理由の一つには士大夫研究がもともと文化史のあるいは社会史的な手法を中心としていたという点があげられ、またそれに関連して宋代史関係の研究会などもいわゆる文史哲の交流の中で行われてきたという蓄積がある。これに関連して、以上の研究が海外とくに欧米の研究と密接に関わっており、その影響が日本の宋代史研究にも反映されている。例えば前掲岡氏の研究はロバート・ハイムズ氏の研究を強く意識したものであり、またそのハイムズ氏自身が日本の研究に多くを負っているように、単に日本の研究が欧米の影響を受けたというだけでなく、むしろそれ以前に欧米の研究が日本の研究から多くを学んでいる点で、研究上の相互交流が非常に密接であると言える。

(4) 課題と展望

以上が近二十年における日本の地域社会史研究の動向の一端であるが、ここにもいくつかの問題点あるいは今後模索すべき課題が残されている。その一つは、宋代社会の論理、あるいは地域の秩序や意味構造は何かという点の解明である。これについては、前述したハーバースの「中間領域論」や「文芸的公共性」の概念、あるいはソシアビリテ論や宋代史研究会でも論集を組んだネットワーク論などが、その一つのきっかけになるのではないかと考えられる。これらの概念が実証研究にどう結びつくのかは個別具体的な研究を待つしかないが、これらの試みは上記の問題点と密接に関わるものであり、また戦後歴史学の見直しを図るという方向でも共通しているのではないかと思われる。すなわち戦後歴史学の基調が階級関係論にあることは周知の通りであるが、その背景には大塚久雄の共同体理論が極めて大きな影響力を持っていたと言える。例えば東洋史の分野においても仁井田陸氏の「同族共同体論」などはそ

の典型的な理論の一つであり、戦後の社会経済史を大きく規定した議論である。これに対してソシアビリテ論などの特徴は社会をそうした団体的な側面からではなく、個人の関係から社会を読み解くという方法であり、ある意味では大塚共同体論をどう見直すか、少なくとも歴史学におけるその適応をどう見直すかを問うている点では共通性がある。そしてこうした試みは前掲岸本氏が提示した「方法的個人主義」にも通底する考え方であり、現在あるいは今後はそうした試みの全体像を実証的に明らかにしていくことが課題とされる。

もちろん、こうした試みは既に中国史では増淵龍夫氏の任侠的結合や谷川道雄氏の「共同体論」にも見られるが、それを日常空間や日常生活から読み解くという点で現在行われている地域社会史研究の新しさがあつるものと思われる。ただ、例えば岸本氏自身がソシアビリテ論に対して率直に語るように、それが果たして中国社会の全体秩序を解明するキーワードになるのか、それとも日常生活の論理を実証的に読み解くための方法概念となるのか、それが十分に明らかにはなっていないのが現状である。もっとも、その二つのうちどちらが良いとか悪いとか、またどちらに収斂させなければならぬとかいうわけではないが、少なくとも宋代地域社会史研究の先には社会秩序というような大きな問題が横たわっていることだけは確かである。なおこの問題の提起自体は既に宋代史研究会の報告集などで行われているが、その解決を見るまでには必ずしも至ってはいない。また筆者自身もこれに答える能力があるわけではないが、現状認識と展望のきつかけだけを指摘するに止まることになった。

二・宗族史研究

(1) 研究動向

次に宗族史研究についてであるが、ここでは宗族全般を扱うのではなく主に地域社会に関わる問題を取り上げて、宋代宗族の問題を考えたみ

たいと思う。ちなみに日本における宗族史研究の詳しい紹介については、井上徹氏の近著（井上00）ならびに小林義廣氏の論考（小林02）をお読みいただければ幸いである。したがって、ここでは近年上梓された小林、井上両氏の業績を中心にまとめてみたいと思う。まず小林氏の論著（小林00）は江西における歐陽脩一族の宗族の実態、および歐陽脩という士大夫のアイデンティティと宗族がどう関わっているかを追求したものである。もっとも、その前半部分は歐陽脩の政治に関わる考察が中心であるが、それでも士大夫にとって宗族が大きな心の拠り所であったという指摘は重要であり、現在のところ宋代士大夫と宗族についての最もよくまとまった専論とすることができると言える。一方、井上氏の著書は蘇州の范氏を始めとする江蘇地方の士大夫と宗族形成の発展過程、およびそれと国家の礼制との関係を宋代から清代まで通史的に考察したものである。それによれば、宋以後の士大夫が宗族を形成した背景には科挙と均分相続による没落の危機があり、国家はそうした士大夫の意図を容認しつつも礼制上では宗法を取り入れることはなかったと結論づけている。この二つの近著をめぐっては様々な意見や評価の相違もあるが、地域社会史研究に関連して共通に言えることは、まず士大夫・官僚がキーワードになっている点、次に宋以後に宗法が流行して士大夫による宗族の結集が盛んになったという点、その結果とくに宋元時代には多くの「名族」が出現したという点である。

しかし、以上の研究においても十分には解明されずに残された課題がいくつもある。一つはそもそも宗法や宗族とはいったい何なのかという根源的な問いであり、宋代地域社会史の中で宗法や宗族がどんな意味があつたのかという疑問を含む問いである。さらに、もう一つの問題は「名族」とは何かというこれもやはり地域社会に即して見た場合の本来の意味であり、それに関連して宗族結集の意図が本当に科挙と均分相続からの危機回避にあつたのかという点である。そしてこれらの問いは

これまでほとんど問題にされることがなく、ある意味では疑う余地もなくほとんど当たり前に受け容れられてきた事柄である。そこで、以下は私見になるが、この二つの問いについて筆者なりの展望を述べたい。

(2) 宗法と規範、秩序

まず宗法および宗族とは何かという問いであるが、一言で言えば宗法とは士大夫も庶民も含めた人々にとって日常生活の秩序、規範であり、宗族はそれをもとにして作られた男系の血縁集団だということである。もつとも、このような結論はある意味で当たり前のことだが、これまで宗法という土地主制における支配被支配の問題や国家の礼制、法制の文脈で語られることが多かったので、ここであえて確認しておきたい。そして日常生活の最も重要な規範としてあげられるのが祖先祭祀であり、これは父祖の祭りに始まって、大きな宗族では高祖さらには始祖や始遷祖、あるいは一族の功労者の祭祀を指す。その祖先祭祀を規定したのが宗法であり、宋代では朱熹の『家礼』やそれを引用した『居家必要事類』の家法、家礼などに詳しく記されている通りである。さらに、この規範の中には冠婚葬祭のしきたりも含まれ、そこから敷衍して義荘などの相互扶助の事業もあげることができる。言い換えれば、祠堂や義荘など族産の設置や族譜の編纂も、祖先祭祀を基本とした日常生活の規範を維持するという観点から行われたものである。

もちろん、このような宗族のあり方は中国古来から続いてきたのではなく、宗法および宗族が政治制度よりも社会的に重要性を増した宋代以後のことである。しかも、この宗法が国家の礼制や地主支配の中でも議論になったことは、宋以後の研究において特に顕著である。しかし、宋以後における宗族のあり方は決してそればかりに集約できるわけではなく、今後は人々にとっての宗法は日常生活の秩序およびそれを維持するための規範であるという視点からの考察も必要ではないかと考えられ

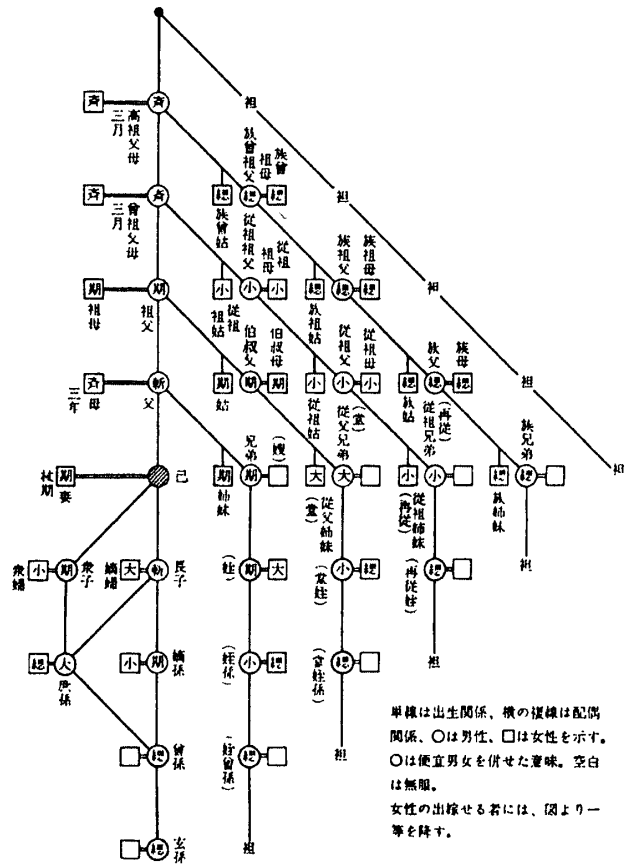
る。^⑧

そして、この規範、秩序を図示したものが図Ⅰの本族図または五服図であり、これは喪服の制度を規定した概念図として広く知られている。しかも、それは図Ⅱにもあるように、自分を中心として近い親族から遠い親族へと喪服の種類が等差的に変わっていくのである。例えば、斬衰は自分の父親と長子に対して着用すべき喪服であり、杖期は祖父と伯父、兄弟、姪子、嫡孫に対して用いられるものである。このようにして五服図の中で同じ喪服の種類に属する人々を線で結ぶと、自分と男系血縁の人々との関係すなわち親疎の関係は、自分を中心として同心円的に広がっていることがわかる。五服図や祖先祭祀というと、ともすれば上下の世代関係ないし支配関係を想起しがちであるが、その構成原理にはこのように同心円的に広がるヨコの関係があつたのであり、それをタテの関係に整理したのが五服図であつたと言えるであろう。しかも、宋代以後の宗族ではこの関係が五服にとどまらずより広い範囲に及び、五服図を基本とする同心円的な人間関係は五服以上に広がっていた。その意味で、この五服図は単なる喪服の制度を表したのではなく、その背後には当時の人々の規範や秩序が示された図と言える。

当然のことながら、この五服図は士大夫庶民にかかわらず、すべての人が持つているマニュアルであり、その点で中国社会はこの同心円的關係が無数に交差した人間関係の集積であると言つても過言ではない。しかも、この関係は同世代間で構成されているわけではなく、祖先の世代から子孫の世代まで連環しており、その意味でこの関係は平面的な交差関係ではなく世代を越えた立体的な関係とも言える。このように同心円的に広がる社会関係を費孝通は「差序格局」と命名し、西洋の「団体格局」と区別している。言い換えれば、中国社会は「団体」や「共同体」によって構成される「団体格局」ではなく、「個人」の家族的秩序によって構成される「差序格局」の社会であつたと言つてわけである(費47)。

もつとも、この秩序関係は同族内に限られており、族外の人間に通用するものではない。その意味で、この秩序は地域社会に開かれた広い意味での社会秩序と言うよりも、むしろ族内に閉じられた秩序と言った方が正しいかも知れない。しかし、その閉じられ方はある領域を持った「団体的な」閉じられ方ではなく、あくまでも個人の意識の中に閉じられている規範であり、しかも先述した通りこの五服図は万人が共通して持っている規範であった。したがって、五服図に象徴されるような宗法の規範は宗族団体が族人を制約する団体的規制という性質のものではなく、族人個人の自発的な意志によって実践される規範だったと言える。その意味で、宋以後の宗族は個々人の集積体であり、共同体というような団体であつたわけではない。費孝通が西洋の「団体格局」に対比して、

図 I 本族の図 (滋賀67より転写)



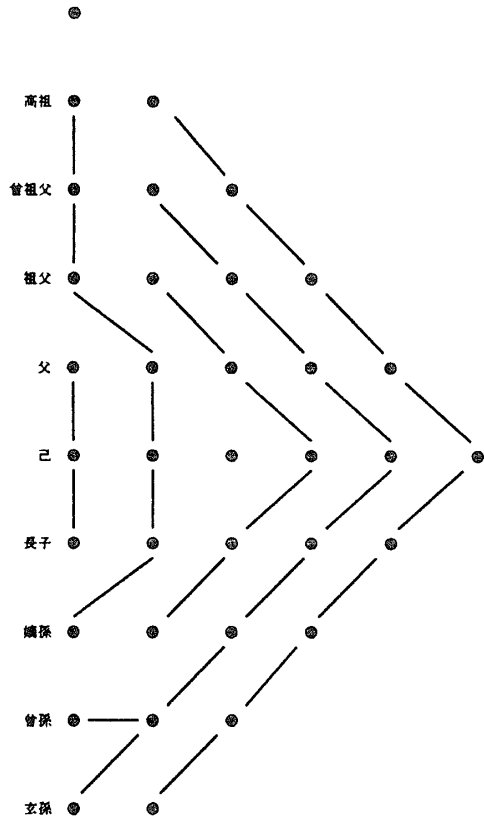
中国社会を「差序格局」と称した真意も、実はここにあつたのではないかと考えられる。

(3) 名族の意味

次に問題となるのが、先にも述べた「名族」の存在および宋代における宗族形成の理由ないし背景である。「名族」ないし士大夫宗族については古くは松井透氏による山東石氏の論考を始め、衣川強氏による河南呂氏の研究、愛宕元氏による臨淄瑯琊氏の研究などがあり、また森田氏は族譜の編纂という観点から宋元時代における「名族」の特徴を考察している。その結果、とくに森田氏によれば、名族と言っても高い流動性に影響されて常に没落の危機をはらんでおり、その点において唐代までの門閥貴族とは大きく異なるという。そしてこの見解は現在の通説となっており、大きな見通しとして筆者も全面的に賛成するところである。ただ、流動性と言っても「名族」はすぐに没落してしまうのではなく、やはり百年、二百年と一定の継続性ないし持続性を持つていたことは事実である。しかも、没落上昇の機運は確かに平時から起こっているとは言っても、やはり両宋交替期や元明交替期など政治的、社会的に大きな変動があつた時期をきっかけに噴出することが多く、平時の社会においてそう簡単に目に見えて没落したり上昇したり、宗族内外の社会階層が交替したりするわけではない。なお、それに関連して一つだけ興味を引くのは宋元交替期における士大夫の動向であり、私見によればこの時期は両宋交替期や元明交替期に比べて「名族」や士大夫一家の継続性ないし連続性が比較的強いように思われる。

さらに、社会的流動性ないし階層移動と言っても、一族全体が社会的に没落したり上昇したりするわけではなく、その中の一部が上昇したり没落したりするのが一般的に見られる現象である。つまり「名族」とか士大夫と言っても、一族の内部においては激しい競争や指導者層の入れ

図II 同心円的概念図



替えがあったことが確認され、決して宗族の構成員全体が高官であったり士大夫官僚であったりするわけではない。例えば、筆者の調べている蘇州范氏の場合にも既に南宋時代にはいくつかの「房」に分かれていたが、そのうち北宋時代まで隆盛を誇っていたのが范純仁の一家である「忠宣房」という家柄である。ところが、彼らは南宋交替期を境にして急激に没落して范氏の指導的立場を失っていることがわかる。すなわち彼らは四世代目までは八十%から九十%の任官率だったものが、五世代目には五十%を割り、八世代以降は〇%となっている。四世代目の比率が高いのは南宋初期に旧法系官人の復権があったからで、通常であればもっと低い値になっていたかも知れない。ただ、どちらにしても彼らの官僚としての地位が次第に低くなっていったことは事実である。これに代わって南宋以降に范氏を握ったのが「監簿房」という范仲淹の長男の系統である。彼らは「忠宣房」とは反対に南宋から任官率を上げてゆき、義莊の管理などを含め一族の頂点に立つことになる。

つまり、士大夫や「名族」の没落上昇とか社会的流動性という場合、個人、家、房、族など様々なレベルでそれが起こっていたのであり、一口で「名族」とか宗族ということでは片づけられない要素を多分に含んでいたのである。したがって、先にも述べたように士大夫とか「名族」と言っても決して一族全員が士大夫・官僚であるわけではなく、個人や家、房によって大きく事情が異なっており、それがまた常に没落上昇という流動性を帯びていた。その背景には唐代までの家格や家柄、身分が固定していた社会とは異なる社会的あるいは政治的、さらには経済的な事情があったことは言うまでもない。このことから、婚姻関係などによって地域社会と宗族を考える場合にも「名族」という外見的なブランドだけで判断するのは危険であり、内部の実態をよく見極めながら、それとの関係で宗族相互や地域の問題を考えることが必要となる。

もともと、彼ら士大夫がそれでも分裂せずに宗族としてまとまった背景にはお互いの打算や利害があったことは確かであり、それはまた高い流動性の中で個人々人が選択した結果であったと言うことができる。その意味では、やはり前掲森田氏が示唆するように、宋代の宗族は唐代までとはまた違った意味で重要であったことは言うまでもない。ただ、その重要性というのはかつての研究のように団体的な性格にあったからではなく、個人の選択を通して宗族の形成や宋代社会の特徴を見ることができからである。それとともに宗族をまとめる紐帯としては先に述べた祖先祭祀の役割や、中国人の血縁観念がより重要な意味を持っており、今後はそうした視点から宗族の問題を考えることが重要ではないかと思われる。また、現在の研究によれば、宗族は士大夫の没落と均分相続による先細りの危機を回避するために結集されたと理解されている。しかし、それはそれで一面の真理であると考えられるが、現実にはそう単純ではなく、先にも見たように士大夫個人々人が没落しても宗族が助けられるわけではなく、また均分相続が延々と続行しても宗族はそれとは関

係なく続いて行つた。このことから見ても、宗族や族産の意味というのは士大夫による没落の危機以外に、先に述べたような祖先祭祀や血縁觀念など宗族本来のあり方に即した観点からも考察し直す必要があるのではないかと考えられる。

(4) 宗族と家族、家庭

それに関連して、今後の日本における宗族研究や宋代史研究では「家族」の問題をもっと重視しないといけないのではないかと考えられる。例えば、先ほど説明した五服図においてもこれはかくあるべき靜態的な關係図であつて、ある意味では作られた模式にすぎない。したがつて、この図が現実に機能し、また宗族が拡大発展して行つた背景には、必ず婚姻や家産分割など家族の存在や役割があつたのである。具体的には「婚姻↓出生↓育児↓子供の婚姻↓家産分割」という家族、家庭の営みを通してこそ五服図の理念は実践され、また宗族も広がつて行つたのであり、単に男性ないし男系の理念によつてのみ宗族が自己増殖したり拡大発展したりするのではない。また、上述した宗族の実態と科挙および家産分割の關係にしても、個別家族の営みと宗族の動きとは決して單純に即応してはいたのではなく、ある一家が没落しても宗族は存続するとうように複雑な相關關係を持つていたのである。したがつて、今後はその關係をより具体的に明らかにしていくことが重要と思われ、単に宗族という枠組みだけの考察では限界に來ているのが現状である。

ちなみに、二〇〇二年八月に天津の南開大学で「中国家庭史国際シンポジウム」が開かれ、七ヶ国で約百名の参加者があつた。¹²ここでの議題は中国あるいは東アジアにおける家族、宗族の問題全般にわたり、人口、戸口や家族構成、家産分割、養子、家庭生活と宗族との関わりについて触れる研究が比較的多かった。ところが、日本では依然として宗族一辺倒の研究に終始しているのが現状であり、世界の研究から見れば少し宗

族に偏りすぎた研究視野と言へる。もちろん、そこには戦後日本における東洋史学の課題や問題意識が存在していることは言うまでもない。しかし、そうした視点の見直しを図られている現在、あるいはそれをとうに過ぎてゐる時期においては、宗族研究の視点や方法も見直されなければならない。逆に、地域社会史の方が家族や婚姻に大きな関心を持つてゐることは先にも紹介した通りであり、これからは宗族のみならず家族、家庭史の研究を進めながら、それと宗族や社会との関連を追究することが重要ではないかと考えている。

結言

以上、八〇年代以降の学説史的検討をふまえながら、宋代の地域社会と宗族について論じてきた。はじめにも述べたように、かつて日本の中国史研究は政治制度史が中心であつたが、現在では社会史が主流と言つて良いほど盛んに論考が発表されている。しかしながら、視点や方法の上ではまだ未成熟なところがあり、今後はより精度の高い議論と実証が要求されると思われる。一方、宗族史研究についてはむしろ政治制度史と同様に古い歴史を持ち、史料の整理をはじめとする基礎的な研究から社会学、人類学などを応用した理論的な研究に至るまでかなり高度な議論がなされている。しかし、研究史が長いだけにともすれば狭い議論となつて、研究者相互の議論や共通認識が十分にできていない面がある。またそれに関連して、地域社会史の研究においては宗族や婚姻など血縁關係が盛んに論じられているにもかかわらず、必ずしも宗族の研究がそれに十分に答えているとは言えない状況にある。したがつて、今後はこうした現状をふまえながら、新たな視点や方法を生み出す議論と連携が必要になるであろう。

本稿では以上の点について甚だ雑駁な議論をしたにすぎず、具体的にどうすればよいのか、また宋代の地域社会や宗族が実際にどうであつた

かという指針や実証を提示するまでには至っていない。また、本稿では時に「宋元時代史」と言いながら元代における地域社会や宗族の問題については、ほとんど言及することができなかった。これらについては今後の課題として、ひとまずここで本論を終えることとしたい。

〔付言〕 本稿は文部科学省・日本学術振興会科学研究費「宋代以降の中国における集団とコミュニケーション」(代表者岡元司、広島大学、平成十四～十六年度)による成果の一部である。また、本稿は平成十四年八月に行われた宋代史研究会の発表原稿に、加筆訂正したものである。史料の閲覧には、松浦史料博物館の久家孝史氏にご協力をいただいた。

註

- (1) 宋代の政治制度史研究については、宮崎92、梅原85を参照。
- (2) このほか日本における地域社会史の研究をまとめた論考については、岸本92、伊藤98などがあり、また宋代の人的結合関係については岡01を参照。
- (3) 水利、開発などの問題についてはス波88、本田94、小野87、95、北田89、96などを参照。その簡単な紹介と論評についてはHiroto 02を参照。これを見てもわかるように、同じ地域社会の研究と云っても、本稿で取り上げた宗族や士大夫など人的結合に関する研究よりは水利、開発に関する研究の方が先行していた。その点を含めた研究史の整理と評価については、後日改めて考えたい。
- (4) 山本00に関しては平田00の論評があり、また岸本99に関しては宋代史研究会01を参照。
- (5) ただ、これは森氏の提起した「地域社会」を意識しつつも、むしろ

かつて氏が精力的に手がけた土地制度史や地主佃戸関係の解明に大きな比重があるものと評価することができる。

- (6) 近年の日本における宋代史研究と海外とりわけ欧米との関係については平田00、遠藤01、宋代史研究会01などを参照。

- (7) 小林00については遠藤01、戸田02の書評が、また井上00については小島01、寺田01、山田02の書評がある。なお、小林02は、後註(12)のシンポジウムにおいて小林氏が口頭報告をしたものである。追って正式な論文集が南開大学より出版されると聞いている。

- (8) 家廟における祖先祭祀については、吾妻01を参照。

- (9) ちなみに、長崎県平戸市の松浦史料博物館には、江戸時代後期に書かれた松浦氏の家系図が所蔵されている。この家系図は「丸系図」と呼ばれ、松浦家三十四代目の松浦浦清から三十七代目の松浦詮に至るまでの一族が、世代ごとに同心円上に描かれている。これと中国における五服図との相関関係ははっきりしないが、これによって日本においても一族の人間関係を同心円的な関係とみなす考えがあったことがわかる。それについては図Ⅲを参照。また、「差序格局」については、岸本98に紹介と解説がある。

- (10) 宋元交替期の士大夫については、遠藤90を参照。

- (11) 以上の点については、次註(12) 遠藤の口頭発表で報告した。

- (12) 天津・南開大学におけるシンポジウムについては、当日に配布された会議論文集と会議手冊がある。詳しい内容については別に紹介したい。ここで家族を扱った論文としては、大澤02、佐々木02などがある。

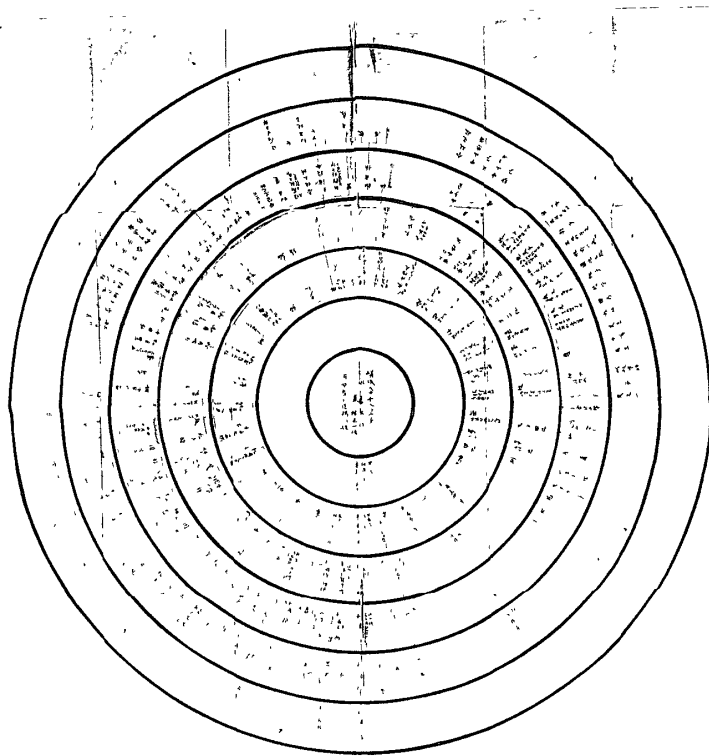
参考文献(主に日本)

青山定雄「五代宋における江西の新興官僚」『和田清博士還暦記念論叢』講談社、

- 一九五一年
吾妻重二「宋代の家廟と祖先祭祀」『中国の禮制と禮學』朋友書店、二〇〇二年
穴沢彰子「唐宋変革期における社会的結合に関する一試論」『中国—社会と文化』
第一四号、一九九九年
- 伊藤正彦「義役」『史林』七五—五、一九九二年
同「中国史研究の「地域社会論」—方法的特質と意義」『歴史評論』第五
八五号、一九九八年
- 井上徹「中国の宗族と国家の礼制」研文出版、二〇〇〇年
伊原弘「宋代明州における官戸の婚姻関係」『中央大学大学院年報』第一号、
一九七二年
- 同「知識人の諸相」勉誠出版、二〇〇一年
上田信「伝統中国」講談社メチエ、一九九五年年
梅原郁「宋代官僚制度研究」同朋舎、一九八五年
遠藤隆俊「范氏義荘の諸位・掌管人・文正位について」『集刊東洋学』第六〇号、
一九八八年
- 同「宋末元初の范氏について」『歴史』第七四輯、一九九〇年
同「書評・小林義廣『歐陽脩 その生涯と宗族』」『創文』第四三〇号、
二〇〇一年
- 大澤正昭「唐宋時期的家庭規模と結構」『中国家庭史国際學術討論会會議論文集』
二〇〇二年
- 小野泰「宋代浙東の都市水利」『中国水利史研究』第二〇号、一九九〇年
同「宋代浙東の地域社会と水利」『中国水利史の研究』、一九九五年
大塚久雄「共同体の基礎理論」『著作集7』岩波書店、一九六九年
岡元司「南宋期温州の名族と科挙」『広島大学東洋史研究室報告』第一七号、
一九九五年
- 同「宋代地域社会における人的結合」『知識人の諸相』勉誠出版、二〇〇
一年
- 愛宕元「五代宋初の新興官僚」『史林』五七—四、一九七四年
岸本美緒「明清期の社会組織と社会変容」社会経済史学会『社会経済史学の課
題と展望』有斐閣、一九九二年
同「明清と李朝の時代」中央公論社、一九九八年
- 同「明清交替と江南社会」東京大学出版会、一九九九年
北田英人「八一—三世紀の江南の潮と水利・農業」『東洋史研究』四七—四、
一九八九年
同「二〇—一四世紀中国の社会と自然についての人類的考察」『宋元時代
史の基本問題』一九九六年
- 衣川強「宋代の名族」『神戸商科大学人文論叢』九—一、二、一九七三年
小島毅「福建南部の名族と朱子学の普及」『宋代の知識人』汲古書院、一九九
三年
同「書評・井上徹『中国の宗族と国家の礼制』」『歴史学研究』第七四九
号、二〇〇一年
- 小林義廣「歐陽脩 その生涯と宗族」創文社、二〇〇〇年
同「日本における中国の家族・宗族研究の現状と課題」『中国家庭史国際
學術討論会會議論文集』二〇〇二年
- 小松恵子「宋代以降の徽州地域発達と宗族社会」『史学研究』第二〇一号、一九
九三年
- 近藤一成「宋代の士大夫と社会」『宋元時代史の基本問題』汲古書院、一九九六
年
- 佐々木愛「朱子家礼中的家族・親族結構及其大小」『中国家庭史国際學術討論会
會議論文集』二〇〇二年
- 佐竹靖彦「唐宋変革の地域的研究」同朋舎、一九九〇年
同「唐宋福建の家族と社会」『人文学報』第二七七号、一九九七年
滋賀秀三「中国家族法の原理」創文社、一九六七年
斯波義信「宋代江南経済史の研究」汲古書院、一九八八年
同「南宋における「中間領域」社会の登場」『宋元時代史の基本問題』汲
古書院、一九九六年
- 須江隆「福建莆田の方氏と祥心廟」『宋代社会のネットワーク』汲古書院、
一九九八年
- 周藤吉之「宋代官僚制と大土地所有」日本評論社（社会構成史体系）、一九五〇
年
- 宋代史研究会「宋代社会のネットワーク」汲古書院、一九九八年
同「宋代人の認識」汲古書院、二〇〇一年

- 高橋芳郎『宋—清身分法の研究』北海道大学図書刊行会、二〇〇一年
 同 『宋代浙西デルタ地帯における水利慣行』『宋代中国の法制と社会』汲古書院、二〇〇二年(初出は八一年)
 寺田浩明『書評・井上徹』『中国の宗族と国家の礼制』『集刊東洋学』第八五号、二〇〇一年
 寺地 遵『南宋末期台州黄巖県事情素描』科研費報告書、一九九三年
 同 『義役・社倉・郷約』『広島東洋史学報』創刊号、一九九六年
 戸田裕司『黄震の広徳軍社倉改革』『史林』七三—一、一九九〇年
 同 『書評・井上徹』『中国の宗族と国家の礼制』『名古屋大学東洋史研究報告』二六、二〇〇二年
 費 孝通『生育制度』商務印書館、一九四七年
 同 『郷土中国』上海観察出版社、一九四七年
 平田茂樹『日本の宋代史研究の新しい視点』『人文研究』第五二卷、二〇〇〇年
 本田 治『宋元時代温州平陽県の開発と移住』『佐藤博士退官記念中国水利史論叢』国書刊行会、一九九四年
 松井 透『北宋初期官僚の—典型』『東洋学報』五一—一、一九六八年
 宮崎市定『宮崎市定全集 2 東洋史』『同 10 宋』『同 11 宋元』岩波書店、一九九二年
 森田憲司『『成都氏族譜』小考』『東洋史研究』三六—三、一九七八年
 同 『宋元時代における修譜』『東洋史研究』三七—四、一九七九年
 森田健太郎『劉富と辛押陀羅—北宋期広州統治の諸相—』『史滴』第二三号、二〇〇一年
 森 正夫『中国前近代史における地域社会の視点』『名古屋大学文学部研究論集』第八三号、一九八二年
 山田 賢『移住民の秩序』名古屋大学出版会、一九九五年
 同 『書評・井上徹』『中国の宗族と国家の礼制』『名古屋大学東洋史研究室報告』二六、二〇〇二年
 山本英史『伝統中国の地域像』慶應大学出版会、二〇〇〇年
 山根直生『唐宋五代の徽州における地域発達と政治的再編』『東方学』一〇三号、二〇〇二年
 柳田節子『宋代郷原体例考』『宋代の規範と習俗』汲古書院、一九九五年

図Ⅲ 丸系図 松浦史料博物館蔵



Endo Takatoshi, Oka Motoshi and Sue Takashi, Social History, Updates on Song History Studies in Japan, Bibliography of Song History Studies in Japan (1982-2000), Journal of Song-Yuan Studies 31 2001.

平成十四年(二〇〇二)十月三日受理
 平成十四年(二〇〇二)十二月二十五日発行